

琉球大学学術リポジトリ

幼稚園年長児がサンタクロースに対して持つ素朴な疑問
— 個別面接における概念的質問と事実的質問の出現頻度 —

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2022-06-08 キーワード (Ja): サンタクロース, 素朴な疑問, 概念的質問, 事実的質問, 年長児 キーワード (En): Santa Claus, naive question, conceptual question, factual question, 5-6-year-old children in senior kindergarten class 作成者: 中尾, 達馬, 永田, 裕美, 中村, 江里, 村上, 加奈恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002018013

幼稚園年長児がサンタクロースに対して持つ素朴な疑問 ——個別面接における概念的質問と事実的質問の出現頻度——

中尾 達馬・永田 裕美・中村 江里・村上 加奈恵

本研究の目的は、幼稚園年長児の持つサンタクロースに対する素朴な疑問(情報探索的質問)に占める概念的質問の割合およびそこに含まれるテーマを明らかにすることであった。調査協力児は、年長児30名であり、個別面接を行った結果、以下の3点が示唆された。すなわち、(a)「サンタさんについて知りたいこと/サンタさんに聞きたいことがある」と答えた年長児は、全体の63.33%であり、平均3.36個の疑問が生じていた。(b)子どもが生じた疑問63個を、概念的質問と事実的質問の2つに分類した場合には、概念的質問が生じた年長児は全体の33.33%であり、生じた疑問に占める概念的質問の割合は19.05%であった。(c)概念的質問のテーマは、(c-1)飛行:トナカイやソリが空を飛ぶこと、(c-2)読心:サンタクロースはなぜか自分がほしいプレゼントの内容を知っていること、(c-3)プレゼント配布方法:どうやって子ども1人ひとりにプレゼントを渡すのか、であった。本研究の学術的意義は、年長児は、サンタクロースの謎に関して、事実的質問が多く概念的質問は少ない、という西欧の先行研究結果を、研究方法を変えて、日本においても確認したことである。

キーワード: サンタクロース、素朴な疑問、概念的質問、事実的質問、年長児

Naive questions that 5-6-year-old children in senior kindergarten class have about Santa Claus: Frequency of occurrence of conceptual and factual questions in individual interviews

Tatsuma NAKAO, Hiromi NAGATA, Eri NAKAMURA, and Kanae MURAKAMI

The purpose of this study was to examine the proportion of conceptual questions in naive questions (information-seeking questions) that 5-6-year-old children in senior kindergarten class have about Santa Claus and reveal the themes in these questions. Thirty children in the senior kindergarten class participated in the individual interview. The main findings were as follows: (a) 63.33% of the children in senior kindergarten class answered that they wanted to know something about Santa Claus and had an average of 3.36 questions. (b) When 63 questions raised by the children were classified into conceptual questions or factual questions, 33.33% of the children had conceptual questions, and the ratio of conceptual questions to the information-seeking questions was 19.05%. (c) The themes of the conceptual questions were (c-1) flying: reindeer and sleighs fly in the sky, (c-2) mind-reading: Santa Claus somehow knows what presents they want, (c-3) how he distributes presents: how does he give each person a present? The academic contribution of this study was that it confirmed the findings of previous studies in Western culture that the children in senior kindergarten class had more factual questions and fewer conceptual questions about the mystery of Santa Claus with a different method in Japan.

Key words: Santa Claus, naive question, conceptual question, factual question, 5-6-year-old children in senior kindergarten class

Woolley & Cornelius (2013)によれば、子どもたちは、3歳あるいは3歳のちょっと前くらいまでに、現実 (reality) と非現実 (nonreality) を区別するために必要な基本的能力を有するようになる。加齢に伴って、現実とファンタジー (fantasy) を区別する能力は上昇し、想像上の生き物 (fantasy beings) の存在を信じる心 (belief; その存在に対して疑惑を持たないこと) は、5歳頃にピークを迎え、8歳・9歳頃までには、大部分の子どもたちが、サンタクロースやイースター・バニーといった行事に関連した想像上の生き物の存在を信じなくなる。

富田 (2014) は、サンタクロースに対する認識の発達を、以下のように整理した。すなわち、4歳頃までは、子どもたちは、サンタクロースを、言葉を話すウサギや空を飛ぶ魔女、火を噴くドラゴンと同じように、世界のどこかにはそのような人物がいたとしても何ら不思議ではないと考えている。つまり、彼らにとっては、サンタクロースの謎 (たとえば、サンタクロースやトナカイはなぜ空を飛べるのか、どうやって1日で世界中の子どもたちにプレゼントを配ることができるのか、煙突のない鍵のかかった家にどうやって入ってくるのか) は、謎でさえない。

5歳・6歳頃になると、子どもたちはサンタクロースの謎を謎として受け止めるようになる。つまり、「本物」のサンタクロースには、謎めいた、超自然的な要素が不可欠であり、そのことを彼らは知っているのである。さらに、彼らは恐れや不安といったネガティブ感情を喚起する出来事に対しては「あり得ない」と手厳しいが、喜びや幸福のようなポジティブ感情を喚起させる出来事に対しては「あり得る」と好意的である。そのため、サンタクロースに関して不可解な点がいくつかあったとしても、その喜びや幸福感をもたらす要素から、その存在を「あり得る」と信じ、さらに、クリスマス行事への参加やサンタクロースの存在を支持する物的証拠 (たとえば、プレゼント) によって、多くの子どもは多少の不可解な点には目をつぶり、サンタクロースの存在を信じ続けるのである (富田, 2002)。

9歳・10歳頃になると、子どもたちはサンタクロースに対して明らかに疑いの目を向けるようになる。彼らは、学校教育で身につけた現実的で合理的な科学的思考を武器に、サンタクロースの謎と向き合い、真相に迫る。そして、ついには、サンタクロースとはそもそも作られた物語であり、現実には存在しない架空の人物であると気づく。

しかし、興味深いことに、サンタクロースの物語は、一度拒絶された後、再び広く受容されるようになる。子どもたちは、サンタクロースが実在しないということに気がついたはじめの頃は、失望をあらわにし、ママとパパは嘘つきなどと、自分を騙した大人の仕打ちに対して感情的な反応を示す。しかし、次第に、クリスマスの持つ幸福をもたらす行事としての機能に目を向けるようになり、その後、サンタクロースを一つの神話 (myths) として再び受容し、生活の一部に位置づけるようになる。

Shtulman & Yoo (2015)によれば、サンタクロースを信じるということだけでなく、信じなくなる (疑惑の目を向ける) ということについても、文化的な規定性がある。すなわち、周りの人から影響を受けるのである。ただし、厳密には、子どもたちは、周りの人たち (たとえば、親、きょうだい、友だち) の証言に基づきサンタクロースの存在を信じるようになるが (子どもたちは、自分の力だけでサンタクロースの神話を作り出すことはない)、その後、彼らは周りの人の証言ではなく、自分自身の知性に基づき、サンタクロースの存在を信じなくなる。つまり、加齢に伴い、子どもたちがサンタクロースに対して疑惑を持つ (disbelieve) ということそのものには否定的な意味合いはなく、その現象は「子どもたちがサンタクロースは一連の驚異的な (超自然的な、あるいは人間でないような) 活動において物理的原理に違反していることに気づき、そこに注意を払い始めるという認知発達の副産物」として、ニュートラルに (あるいは肯定的に) 捉えることができるのである。興味深いことに、子どもたちは、4歳から9歳まで、サンタクロースが驚異的な特性を持っていると明らかに考えており、それにもかかわらず、サンタク

ロースの実在を強く信じている (Boerger, 2011)。

それでは、子どもは、サンタクロースに対して、素朴にどのような疑問を持っているのだろうか。Baxter & Sabbagh (2003) は、4 歳児と 8 歳児が、親と一緒にクリスマスのアニメ映像を視聴したときに、どのような疑問を口にするかを分析した。その結果、8 歳児は「一晩で世界中を回れるのはどうして？」など、サンタクロースの謎に関する質問が多かったのに対して、4 歳児は「サンタさんの奥さんってどんな人？」など、サンタクロースの人となりに関する謎としては初歩的な疑問を口にするが多かった。

Shtulman & Yoo (2015) は、Baxter & Sabbagh (2003) の結果を、異なった方法で再検討した。彼らは、一般公開されているサンタクロースに対して送られた電子メールのアーカイブについて分析を行った。具体的には、彼らは、4 歳から 9 歳の子どもがサンタクロースに対して送った 392 通の電子メールをダウンロードし、そのうち情報探索的質問 (information-seeking question) が含まれた 45 通のメールを分析の対象とし、子どもの質問が事実的なものなのか、概念的なものなのかを分類した。ここでいう事実的質問 (factual question) とは、サンタクロース神話を前提として、サンタクロースの住む場所や現れる場所など、付加的な情報を求めるという質問である (たとえば、北極は寒いですか？妖精の名前は何かというのですか？あなたのトナカイは夏の間どうしているのですか？新しいトナカイにオリーブという名前をつけましたか？)。概念的質問 (conceptual questions) とは、サンタクロース神話の概念的な基礎に対して疑問を投げかけ、サンタクロースが違反する様々な物理的制約について情報を得ようとする質問である (たとえば、どうやって煙突をくぐり抜けるの？どうやってソリで空を飛ぶの？どうやって世界中のみんなに会いに行くの？僕が悪い子どもだってことを、どうやって分かるの？)。事実的質問と概念的質問の本質的な違いは、概念的質問は相手に対して「説明」を求めるが、事実的質問は「詳細」を求める点にある (Shtulman & Yoo, 2015, p. 54)。45 通の情報探索的質問メールは、30 通が事実的質問、15 通が概念的質問に分類された。分析の結果、Baxter & Sabbagh (2003) と同様に、概念的質問は、加齢に伴い増加していた。すなわち、4 歳から 6 歳の子どもが送った 19 通のメールのうち、概念的質問は 3 通だけであったが、7 歳から 9 歳の子どもが送った 26 通のメールについては、概念的質問は 12 通にもものぼった (このことについては、 χ^2 検定の結果、有意な関連性が得られた)。つまり、物理的可能性の理解においてより洗練されている 7 歳から 9 歳の子どもは、4 歳から 6 歳の子どもに比べて、サンタを巡る神話の概念的な謎 (矛盾) について、より好奇心旺盛であった。

それでは、日本において、子どもたちは、幼稚園生活最後の 12 月において、サンタクロースに対して、素朴にどのような疑問 (情報探索的質問) を持ち、それらの疑問において概念的質問はどの程度の割合を占めるのであろうか。この問いに対して直接的な検討を行った研究はほとんどない。そこで本研究では、12 月に、幼稚園年長児 (以下、年長児とする) に対して「サンタさんについて知りたいことはある？」または「サンタさんに聞きたいことはある？」と質問をし¹、(a) 彼らがサンタクロースに対して持つ素朴な疑問に含まれるテーマ、(b) 彼らが持つ素朴な疑問における概念的質問や事実的質問の割合、(c) 概念的質問のテーマを明らかにすることを試みた。このような検討を行うことは、多面的で豊かな子どもの表象世界の一端を明らかにするという点においてだけでなく、子どもの成長発達を見守る大人側の関わり (保育者や保護者の関わり) を考える上でも、非常に重要であると著者たちは考えた。

¹ 本来であれば質問の仕方を統一すべきであったが、本研究では、この統一が図れなかった。これは調査実施上の不手際であるが、このミスによって、調査協力児の回答が大きく左右されることはない、と著者たちは判断した。

方法

調査協力児 調査協力児は、山口県にある私立A幼稚園の年長児30名（男児16名、女児14名）であった。

面接の方法・内容 2006年12月14日（すなわち、クリスマスが近づいてきた時期に）、第2—第4著者の3名が、大きなホールの3隅に位置し、子どもと1対1で面接を行った。面接者は、調査協力児の性別を記入後、以下の導入・質問を行った。所要時間は一人につき約5分であった。

導入：①面接者：12月って何がある日か分かるかな？→子ども：クリスマス

※クリスマスという返答がない場合には、面接者は「クリスマスの日があるよね」と言う。

②面接者：誰が家に来るの？→子ども：サンタ

※サンタという返答がない場合には、面接者は「サンタが来るよね」と言う。

質問：①「サンタさんについて知りたいことはある？」

または「サンタさんに聞きたいことはある？」

②「サンタさんはいると思う？」

結果と考察

Table 1に、調査協力児の回答の詳細を整理した。必要に応じ、適宜、参照していただきたい。

性別×「サンタさんはいると思う？」のクロス集計表 性別と「サンタさんはいると思う？」（質問②）のクロス表集計結果を行った。その結果、サンタクロスが「いる」と答えた年長児は、全体の83.33%（25名；男児11名、女児14名）であった。女児は、14名中14名（100%）がサンタクロスは「いる」と回答していたが、男児は、「いる」と答えた子どもは16名中11名（68.75%）であり、4名は「いない」、1名は「分からない」と答えた。

「サンタさんについて知りたいこと／サンタさんに聞きたいことはある？」と「サンタさんはいると思う？」のクロス表集計 「サンタさんについて知りたいこと／サンタさんに聞きたいことはある？」と「サンタさんはいると思う？」（質問②）のクロス表集計を行った。その結果、「サンタさんについて知りたいこと／サンタさんに聞きたいこと」があると答えた子どもは、全体の63.33%（19名）であり、その内訳は、サンタクロスがいると答えた子どもの68.00%（25名中17名：男児7名、女児10名）、サンタクロスがいないと答えた子どもの50.00%（4名中2名：男児2名）であった。サンタクロスを信じないと言った子ども4名中2名が、サンタクロスに対する疑問（どこから来た？どんな人？）をあげたことから、年長児は、サンタクロスの存在を信じる・信じないに関わらず、サンタクロスに対して何らかのイメージを膨らませ、何らかの疑問を抱いているという可能性がある。そのため、幼児のサンタクロスを信じる・信じないという言葉に対して、大人が過敏に反応する必要はないと考えられる。

「サンタさんについて知りたいこと／サンタさんに聞きたいことはある？」（質問①）の内容分析（1）：KJ法によるテーマの分析 子どもの回答は、複数回答を含めて合計66反応であった。このうち、疑問・質問ではない2反応と内容が重複する1反応を除き、合計63反応を分析の対象とした（Table 1）。これら63反応は、全て情報探索的な質問である。素朴な疑問が生じた子どもたちにおいては（すなわち、疑問がない子どもを除いた場合には）、生じた疑問数の平均値

Table 1 個別面接結果

id	性別	質問 ①	質問 ②	回答 数	概念的 質問数	事実に 質問数
1	男	どこから来た？	0	1	0	1
2	男	サンタの顔を見てみたい。[夢を知って貰いたい。] サンタはおもちゃを何でくれるの？	2	2 <3>	0	2
3	男	おもちゃはどうやって分かる？	2	1	1	0
4	男	なし	0	0	0	0
5	男	サンタさんはどんな人？	0	1	0	1
6	男	どうして欲しいプレゼントが分かるの？	2	1	1	0
7	女	ソリは飛ばないのになぜ飛ぶ？サンタのおうちはある？何でトナカイとサンタは一緒にいるの？トナカイに赤ちゃんはいるの？トナカイはなぜ飛ぶの？サンタはなぜ髭があるの？夜になぜ来るの？サンタはいろいろな国にいるの？[朝にはこないの？]	2	8 <9>	2	6
8	女	なぜ髭がはえている？どんな顔か知りたい。なぜソリに乗って空を飛べるの？なぜ頼んだプレゼントが分かるの？	2	4	2	2
9	女	どこから来てるの？プレゼントはどこから持って来てるの？お父さんとかお母さん、きょうだいもいるの？	2	3	0	3
10	女	おもちゃはどこで買うの？トナカイは飛べる？サンタは何歳？女の人のサンタもいる？	2	4	1	3
11	男	なし	2	0	0	0
12	男	なし	2	0	0	0
13	男	サンタはうんちがでたら大きいの？[頭からげんこつを落として殺したい、なぜか自分がトナカイにのりたから。]	2	1 <2>	0	1
14	女	サンタは何で死なないの？トナカイは空飛べるの？何で帽子をかぶっているの？	2	3	1	2
15	女	サンタって何でひげが白いの？サンタってソリがうしろにあるか知りたい。サンタさんにトナカイがいるか知りたい。大きい袋を持っているか知りたい。何でクリスマスになるとトイザラスにサンタがいっぱいいるか知りたい。何でいっぱい袋の中におもちゃを持っているか知りたい。何で寝ている時に来るか知りたい。	2	7	0	7
16	女	住んでいるところは？おもちゃはどうやってひとりずつ子どもに渡すの？	2	2	1	1
17	女	サンタが何を貰いたいかを知りたい。	2	1	0	1
18	女	なし	2	0	0	0
19	女	なし	2	0	0	0
20	女	なし	2	0	0	0
21	男	なし	2	0	0	0
22	男	誕生日がいつか知りたい。プレゼントをくれるのはなぜサンタなの？サンタはいつも帽子をかぶっていて見えないから、髪の毛がどうなっているか知りたい。どうして真夜中に来るの？人は髪とかひげとか黒いのに何でサンタは白いの？トナカイは何で空を飛ぶの？なぜサンタは帽子をかぶっているの？	2	7	1	6
23	男	なし	0	0	0	0
24	男	なし	1	0	0	0
25	男	サンタの工場ってある？どんな顔か知りたい。	2	2	0	2
26	男	なし	2	0	0	0
27	男	どこにおうちがあるの？トナカイにはなぜ角がある？おもちゃは何で分かるの？	2	3	1	2
28	女	サンタさんが優しいか知りたい。何で夜に来るの？夜に何でプレゼントをくれるの？トナカイが空を飛ぶのは何で？赤いものばかり着てるのは何で？どうしてサンタは優しいの？	2	6	1	5
29	女	なし	2	0	0	0
30	女	何で夜に来るの？何でプレゼントの包みがサンタ模様？サンタはなぜ一人じゃなくくてみんなに来るの？なぜ、おじいさん？なぜ雪だけじゃなく雨の日でもプレゼントの包みがあるの？トナカイがソリをひくのは何で？	2	6	0	6
合計			—	63	12	51

注) 質問①: サンタさんについて知りたいことはある？/サンタさんに聞きたいことはある？、質問②: サンタさんはいと思う？(0=いない、1=分からない、2=いる)である。id1—10は面接者A、id11—20は面接者B、id21—30は面接者Cが面接を行った。質問①においては、面接者AとCは「サンタさんについて知りたいことはある？」、面接者Bは「サンタさんに聞きたいことはある？」と子どもたちに対して質問をした。「質問①」における[]で括った3反応は、分析の際には削除した反応である。「質問①」で網掛けをした12反応は、概念的質問である。「回答数」における<>で括った数字は、全反応数であり、分析の際には<>外の数字を用いた。id7における概念的質問数2の考え方については、本文脚注2を参照のこと。

は3.36個（中央値＝3.00、*SD*＝2.34、range＝1－8）であった。第2著者と第4著者が、KJ法（川喜田，1967）を用いて、類似する反応・異なる反応の分類を行い、その後、第1著者がその内容を確認した（Table 2）。その結果、合計63反応に現れたテーマは、(a) サンタクロース47.62%（30反応）、(b) プレゼント23.81%（15反応）、(c) トナカイ15.87%（10反応）、(d) 夜間到来7.94%（5反応）、(e) ソリ4.76%（3反応）であった。Table 2からは、サンタクロース本人については、白いひげを生やした赤い服のおじいさんであり、プレゼントを持って、トナカイが引いたソリに乗って、夜間に到来する、という私達が日常的に持つサンタクロース像を年長児も共通して持っていることが示唆された。

「サンタさんについて知りたいこと／サンタさんに聞きたいことはある？」（質問①）の内容分

Table 2 年長児がサンタクロースに対して抱いた素朴な疑問の内容分析

(a)サンタ (30)	・容姿 (11)	・どんな顔か見てみたい・知りたい (3)、なぜ帽子をかぶっているの? (2)、なぜ髭があるの? (2)、なぜ髭が白いの? (2)、いつも帽子をかぶって見えないから髪の毛がどうなっているのか知りたい (1)、赤いものばかりきているのは何で? (1)
	・住居 (6)	・住んでいるところはどこなの? (4)、サンタはいろいろな国にいるの? (1)、サンタのおうちはあるの? (1)
	・プロフィール(5)	・誕生日が知りたい (1)、女の人のサンタもいるの? (1)、サンタにお父さんとかお母さん、きょうだいはいいるの? (1)、何でおじいさんなの? (1)、サンタは何歳なの? (1)
	・性格 (3)	・サンタは優しいの? (2)、サンタはどんな人なの? (1)
	・その他 (5)	・サンタはうちがでたら大きいなの? (1)、サンタさんは何で死なないの? (1)、何でクリスマスになるとトイザラスにサンタさんがいっぱいいるの? (1)、サンタの工場ってあるの? (1)、サンタは何をもらいたいなの? (1)
(b)プレゼント (15)		・なぜ欲しいプレゼントがわかるの? (4)、プレゼントをくれるのは、何でサンタなの? (3)、プレゼントの入手方法 (2)、何でサンタの袋にはおもちゃがいっぱい入っているの? (1)、大きな袋を持っているの? (1)、何で包みがサンタ模様なの? (1)、何で雪だけでなく雨の日でもプレゼントに包みがあるの? (1)、サンタはなぜ一人じゃなくてみんなにくるの? (1)、どうやって1人ずつプレゼントを渡すの? (1)
(c)トナカイ (10)		・トナカイは空を飛ぶの? (5)、何でトナカイとサンタは一緒にいるの? (2)、トナカイには何で角があるの? (1)、トナカイがソリをひくのはなんで? (1)、トナカイに赤ちゃんはいいるの? (1)
(d)夜間到来 (5)		・なぜ夜に来るの? (5)
(e)ソリ (3)		・何でソリにのって空を飛べるの? (2)、何でサンタはソリに乗ってるの? (1)

注) 括弧内の数字は生起された反応数（出現頻度）である。

析(2)：概念的質問と事実的質問 Shtulman & Yoo (2015)を参考に、本研究で得られた合計63反応（情報探索的質問63個）の中に、概念的質問がいくつあるのかを検討した。Shtulman & Yoo (2015)において具体的に示されていた手がかりは、(a)「どうやって」(How)からはじまる情報探索的な質問の74%は概念的質問であること、(b)サンタクロースの驚異的な能力（超自然的な能力）の例は、(b-1)一晩で世界中を旅すること、(b-2)ありとあらゆる子どもが良い子なのか悪い子なのかを知っていること、(b-3)1つの工場ですべてのクリスマスのおもちゃを作っていること、(b-4)トナカイがひくソリで空を飛ぶこと、(b-5)煙突をくぐって家の中に入ってくること、であった。本研究においては、子どもの素朴な疑問を、(a)サンタクロースの持つ超自然的能力の発揮に関するものかどうか（概念的質問かどうか）、(b)概念的質問でないとすれば、サンタクロース神話を前提として、付加的にさらなる詳細な情報を求めているかどうか（事実的質問かどうか）という2つの基準へ順番に当てはめてみて、どちらの基準が子どもの素朴な疑問に対して相対的により当てはまるのかを検討・決定した。たとえば、「サンタクロースはなぜ夜にしか来ないのか?」（夜間到来）という疑問を概念的質問とするのか事実的質問とするのかについては、夜に到来すること自体は超自然的能力の発揮を直接意味するものではないので、概念的質問（サンタクロースが違反する様々な物理的制約について情報を得ようとする質問）ではないと判断を

し、次に、事実的質問の基準（サンタクロース神話を前提として、付加的な情報を求める質問であるかどうか）を当てはめてみて、この場合であれば（夜間到来であれば）、概念的質問の基準には当てはまらず、事実的質問の基準には当てはまるので、事実的質問であると判断した（Table 1）。その結果、概念的質問は情報探索的質問 63 個のうち 12 個（19.05%）であった（概念的質問の平均 1.20 個、中央値 = 1.00、 $SD = 0.42$ 、 $range = 1 - 2$ ）。そして、概念的質問におけるテーマの内訳は、(a) 飛行：トナカイが空を飛ぶこと、ソリが空を飛ぶこと、(b) 読心：サンタクロースはなぜか自分がほしいプレゼントを知っていること、(c) プレゼント配布方法：どうやって 1 人ひとりにプレゼントを渡すの？であった（出現頻度は、(a) = 7 [トナカイ = 5、ソリ = 2]²、(b) = 4、(c) = 1）。

Shtulman & Yoo (2015) における電子メールの分析では、4 歳から 6 歳の子どもが送った情報探索的質問メール 19 通のうち、概念的質問メールは 3 通（15.79%）だけであった。本研究では、年長児が回答しやすいように、研究手法を変えて、子どもたちに対して個別面接を実施し、彼らに口頭で回答を述べて貰ったが、全体の 33.33%（全 30 人中 10 人）、サンタクロースに対する疑問を回答した年長児の 52.63%（19 人中 10 人）が概念的質問を回答しており、情報探索的質問に占める概念的質問の割合は 19.05% であった。つまり、本研究では、Shtulman & Yoo (2015) の結果と類似した結果が得られたのである。

したがって、Shtulman & Yoo (2015) と本研究からは、生成された情報探索的質問に占める概念的質問の割合は、概ね 16 - 19%、すなわち、10% 代後半であることが示唆され、両研究においては、年長児は、概念的質問に比べて、事実的質問の方を数多く心の中に抱くことが共通して示唆されたといえよう。なお、概念的質問や事実的質問の有無と性別や「サンタさんはいると思う？」（質問②）とのクロス表集計を行ったが、年長児においては、これらの変数間に明確な関連性は得られなかった。

次に、Shtulman & Yoo (2015) を参考に、本研究で得られた情報探索的質問 63 個のうち、事実的質問がいくつあるのかを検討した（Table 1）。その結果、事実的質問は 51 個（80.95%）であった（事実的質問の平均 3.00 個、中央値 = 2.00、 $SD = 2.12$ 、 $range = 1 - 7$ ）。Shtulman & Yoo (2015) における電子メールの分析では、4 歳から 6 歳の子どもが送った情報探索的質問メール 19 通のうち、事実的質問メールは 16 通（84.21%）であった。本研究のように、個別面接を実施し、子どもたちに口頭で回答を述べて貰った場合には、年長児においては、全体の 56.67%（全 30 人中 17 人）、サンタクロースに対する疑問を回答した年長児の 89.47%（19 人中 17 人）が事実的質問を回答しており、情報探索的質問に占める事実的質問の割合は 80.95% と、Shtulman & Yoo (2015) の結果と類似した結果が得られた。

結果のまとめおよび今後の課題 本研究で得られた結果を整理すると、以下ようになる。すなわち、(1) サンタさんについて知りたいこと／サンタさんに聞きたいことがあると答えた年長児は、全体の 63.33% であり、平均 3.36 個の疑問が生じていた。(2) 子どもに生じた疑問を、概念的質問（サンタクロース神話の概念的な基礎に対して疑問を投げかけ、サンタクロースが違反する様々な物理的制約についての情報を得ようとする質問）と事実的質問（サンタクロース神話を前提として、サンタクロースの住む場所や現れる場所など、付加的な情報を求める質問）とに分類した場合には、概念的質問が生じた年長児は全体の 33.33%、情報探索的質問が生じた年長

² Table 1 の id 7 の「ソリは飛ばないのになぜ飛ぶ?」「トナカイはなぜ飛ぶの?」については、飛行という行動（動作・動き）は同じであるが、行動主体については、「ソリ」は無生物、「トナカイ」は生物である。子どもたちは、サンタクロース神話について、サンタクロース、プレゼント、トナカイ、ソリという単位で、様々な思いを巡らしていると考えられるため（Table 2）、本研究では、id 7 の概念的質問数を 1 ではなく 2 とした。

児の 52.63% であり、生じた情報探索的質問における概念的質問の割合は 19.05% であった。また、概念的質問のテーマは、(a) 飛行：トナカイやソリが空を飛ぶこと、(b) 読心：サンタクロースはなぜか自分がほしいプレゼントを知っていること、(c) プレゼント配布方法：どうやって 1 人ひとりにプレゼントを渡すのか、であった。

年長児において事実的質問が多く概念的質問が少ないという結果については、結局のところ、年長児のサンタクロースに対する認識はどのような状態にあると考えられるのだろうか。たとえば、彼らはサンタクロースを自分たちと同様に通常的能力しか持たない存在として捉えているのであろうか、あるいは、サンタクロースが超自然的な能力を持つことは承知しているものの、そのような能力をごく通常的能力として捉えているのであろうか、もしくは、超自然的な能力を持っており、それは普通では考えられないようなものであると捉えてはいるものの、質問生成の段階でそうした側面にうまく注意を向けられないのであろうか³。また、本研究においては、年長児のみを調査対象としたが、加齢に伴ったサンタクロース神話における概念的質問・事実的質問の推移（年長児は、年少児や年中児とどう違うのか、小学生とはどう違うのか）についても、今後さらなる検討が必要であろう。

本研究の学術的意義は、年長児は、サンタクロースの謎に関して、事実的質問が多く概念的質問は少ない、という西欧文化圏で得られた研究結果を、研究手法を変えて、日本においても確認したことである。冒頭でも述べたが、加齢に伴い、子どもたちがサンタクロースに対して疑惑を持つこと自体は、「子どもたちがサンタクロースの行う驚異的な（超自然的な、あるいは人間でないような）活動は、物理的原理に違反していることに気がつき、そこに注意を払いはじめるといふ認知的な副産物」であり、そのこと自体に否定的な意味合いはない（Shtulman & Yoo, 2015）。言い換えると、サンタクロースに関して他の人からもたらされる証言（目視で確認できない証言を含む）に対して、子どもは、何も考えずにそれらに従うのではなく、彼らなりの物理的可能性の理解に基づきながら、受容を行うのである（Shtulman & Yoo, 2015）。つまり、「子どもはありもしない話に触れ、ああでもないこうでもないと自ら考えることによって、感性や知性が刺激されるとともに、一方向だけではない多様な視点を身に付けていく」（富田, 2003, p. 76）のである。ただし、サンタクロースの謎に関して、年長児は、4 歳までの子どもとは異なり、サンタクロースの謎を謎として受け止めることはできているが（富田, 2014）、彼らの持つ疑問は、初歩的（Baxter & Sabbagh, 2003）、あるいは事実的（Shtulman & Yoo, 2015）であって、彼らは、必ずしも、概念的にサンタクロースの謎の核心に迫りつつある訳ではない。幼稚園年長という発達段階における子どものサンタクロースの謎に関する認知状態とは、いくつか（1—8 個）の情報探索的質問の中に、1—2 個の概念的質問が出現しはじめていて、事実的質問と共に併存している、たとえるならば、鍋の中に切った具材を入れて火を付けたばかりの生煮えの状態であると推測される⁴。

サンタクロース体験の大きな魅力は、本研究で取りあげたサンタクロースの謎、すなわち、サンタクロースの持つ不思議性と、ケーキ・飾り付け・プレゼントを通して育まれる親や保育者をはじめとした大人に大切にされているという子どもの感覚である（富田, 2003）。今後も、子どもたちと一緒に、サンタクロースの謎を楽しんでいきたいと思う。

³ 富田昌平、私信、2021 年 9 月。

⁴ 富田昌平、私信、2021 年 9 月。

付記

本研究は、第一著者指導のもと、永田裕美・中村江里・村上加奈恵の3名がグループで執筆を行った山口芸術短期大学2006年度卒業論文（永田・中村・村上，2007）で得られたデータ（Table 1）に対して、概念的質問と事實的質問の出現頻度という視点から再分析を行い、新たに論を展開したものです。調査にご協力くださいましたA幼稚園の園長先生をはじめとする諸先生方、子どもたち、そして本稿を作成するにあたり的確な助言をくださいました富田昌平先生（三重大学）へこの場を借りて謝意を表します。

引用文献

- Baxter, J. M., & Sabbagh, M. A. (2003). *Young children's questions about Santa Claus: A preliminary analysis*. Paper presented at the the 3rd biennial meeting of the Cognitive Development Society Park City, UT.
- (Cited indirectly from Woolley, J. D., & Cornelius, C. A. (2013). Beliefs in magical beings and cultural myths. In M. Taylor (ed.), *The Oxford handbook of the development of imagination* (pp.61 – 74). New York: Oxford University Press.)
- Boerger, E. A. (2011). 'In fairy tales fairies can disappear': Children's reasoning about the characteristics of humans and fantasy figures. *British Journal of Developmental Psychology*, 29, 635 – 655.
- 川喜田 二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- 永田裕美・中村江里・村上加奈恵 (2007). サンタを信じるって意味があるの?——素朴な疑問, 性格との関連を手がかりに—— こども総合研究, 19, 17 – 24 (執筆者の短大2年生やその指導教員、そして1年生などに配布される山口芸術短期大学保育学科発行の卒業論文集).
- Shtulman, A., & Yoo, R. I. (2015). Children's understanding of physical possibility constrains their belief in Santa Claus. *Cognitive Development*, 34, 51 – 62.
- 富田 昌平 (2002). 実在か非実在か——空想の存在に対する幼児・児童の認識—— 発達心理学研究, 13, 122 – 135.
- 富田 昌平 (2003). イメージ・想像力・ファンタジーと遊び 丸山 良平・横山 文樹・富田 昌平 保育内容としての遊びと指導 (pp. 59 – 79) 建帛社
- 富田 昌平 (2014). 子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのか?——大学生による回想報告をもとに—— 三重大学教育学部研究紀要, 65, 149 – 158.
- Woolley, J. D., & Cornelius, C. A. (2013). Beliefs in magical beings and cultural myths. In M. Taylor (Ed.), *The Oxford handbook of the development of imagination* (pp. 61 – 74). New York: Oxford University Press.